TOSHIMA 国際アート・カルチャー都市としま

かたりべ120

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

左　「題不詳」〈裏書に(1933年)9月2日,四ノ二 村田静子,二重丸〉
中上　「長崎第二尋常小学校」〈1933年撮影,豊島新聞社 提供〉
中下　「學校のお庭」〈裏書に(1933年)10月3日,四ノ二 村田静子,甲〉
右上　『ヤサシイ クレヨン画お手本』〈1928年発行,画作 榎本松之助〉
右中　『クレイヨン習画帖』〈1929年発行,画作 網島亀吉〉
右中　『クレイヨン画手本』〈1929年発行,画作 石川兼次郎〉
右下　『尋常小學圖画 第四學年兒童用』〈1933年発行,文部省 著作〉

昭和初期の児童自由画にみる長崎第二尋常小学校

郷土資料館では昨年、長崎町で育った村田静子氏が一九三〇（昭和五）年の長崎第二尋常小学校（現豊島区立要小学校）入学から、一九四一年の東京府立第五高等女学校（現東京都立富士高等学校）卒業までに描いた約五二〇枚の絵の寄贈を受けました。自由画や臨画、クレヨン画・デッサン・水彩画・日本画・幾何模様、裏に甲乙や二重丸といった評価に教員からのコメントが添えられた絵など、昭和初期の同地域の公立学校における美術教育のあり方を知る上で貴重な資料群です。特に自宅や学校周辺を子どもならではの視点で描いた自由画からは、写真や大人の絵からはみることができない地域の様子を知ることができます。

上の児童画は同氏が尋常小学校四年在籍時に描いた作品で、同時期に同じ場所を撮影した写真と比較すると印象的な正面の窓の形など細かな造形までよく観察して、クレヨンを使って色鮮やかに描いていることがわかります。クレヨンは、それまでの手本の絵を忠実に模写する臨画教育を批判し、「寫生、記憶、想像等を含む―即ち、臨本によらない、兒童の直接な表現」（山本鼎『自由畫教育』一九二一年）である自由画を奨励した自由画教育運動とともに児童用画材として全国に普及しました。同氏が使用した三冊のクレヨン画練習帖や、国定教科書の『尋常小學圖画』にもこの運動の影響がみられます。この作品が描かれた前年まで同校長を務めた小野重内は「本校では兒童の保健の爲に野外寫生や、校外教授等を試みて相當の成績を収めてゐます。ニコ〳〵ピン〳〵、ミンナデナカヨク、何カデヒトヨリ。の標語を守つていつでもニコ〳〵ピンピンしてゐます。」（『郊外畫報 第一巻』一九三一年）と語っており、一九二八年に開校したばかりの公立学校である長崎第二尋常小学校でもこの時期、自由画教育運動の影響を受けた実践が試みられていたことがうかがえます。

（郷土　甲田）

豊島区ゆかりの作家たち

豊島区では、戦前から今日まで著名な作家たちが暮らし、集い、活発な創作活動をしています。大衆文学、詩歌、児童文学、童謡、童画、マンガなどジャンルは多岐にわたり、ゆかりのある主な作家だけでも百名以上になります。このコーナーでは、ゆかりの作家ひとりひとりを紹介します。

マンガ家　佐川美代太郎（さがわみよたろう）

（一九二三―二〇〇九）

小林美菜子氏提供

【マンガ家への道】

佐川美代太郎（本名小林仁（こばやしじん））は、大正一二（一九二三）年一二月一日、茨城県真壁町（現・桜川市）の代々畳職を営む家の二男に生まれました。幼い頃からマンガを描くことが好きでしたが、弁護士を目指して中央大学法学部に入学します。

しかし、昭和一八（一九四三）年、学徒出陣を経て、終戦後は商学部に転部し、池袋近くの叔父の家に間借りしながら大学を卒業します。昭和二四（一九四九）年、東京冷凍機に入社しますが、労働争議を契機に退社すると、日頃からマンガを描き続けていたこともあり、『読売アンデパンダン展』（読売新聞社主催）に投稿し、三度目には入選します。さらに、昭和二六（一九五一）年の年間最優秀賞を受賞すると、これを契機にプロのマンガ家に転向します。

また、『アサヒグラフ』（朝日新聞社発行）の『漫画学校』にも複数投稿し、昭和二八（一九五三）年、優秀新人賞を受賞し、翌年、その実力を認められ、当時のマンガ業界を牽引していた『漫画集団』同人となります。昭和三一（一九五六）年四月、『日本経済新聞夕刊』に連載開始された『ほいきた君』は、後に『へいきの平ちゃん』にタイトルを変更して、昭和三九（一九六四）年まで続き、人気を博します。

またこの頃、昭和二五（一九五〇）年に、自宅を高田本町（現・雑司が谷）に構えています。

【佐川の探究心と進化する作品】

佐川は、マンガ執筆の傍ら、昭和二九（一九五四）年に目白絵画研究所へ通い、デッサンやクロッキー（速写）を学んでいました。さらに中国文化や仏教への理解を深め、その知識や描写技法を駆使し、まったく異なるタイプの作品を次々に発表します。

佐川は、現代マンガの特性といえるマンガの絵を、単なる絵文字の連続として捉えるのではなく、一枚絵の芸術性やコマの構成にこだわりました。渾身の作品である中国歴史漫画『汗血のシルクロード』（一九七〇・高樹書房刊）や『望郷の舞』（一九七二・翠楊社刊）を、雑誌掲載を経て発表すると、読者からの大反響と、漫画界からの称賛を受けます。

『望郷の舞』翠楊社（1972）豊島区蔵

また、絵本も手掛け、『ぐろう』（一九七一・こぐま社刊）は、日本漫画家協会奨励賞を受賞し、昭和四八（一九七三）年、『漫画家の絵本の会』の発足当初からのメンバーとなり、毎年正月に日本橋丸善を拠点に開催された『漫画家の絵本の原画展』に参加します。一九八六（昭和六一）年には、『ぽつんこかっぱ』（一九八六・こぐま社刊）が、厚生省（現・厚生労働省）による中央児童福祉審議会の特別推薦を受け、児童文化財作品になりました。

『ぐろう』こぐま社（1971）豊島区蔵

一方、昭和四八（一九七三）年に京都精華短期大学美術学科教授に就任。以降は、マンガの芸術性を追求し続けながら、ほかに日本漫画家協会常務理事、アメリカスタンフォード大学客員研究員も歴任。平成五（一九九三）年、京都精華大学名誉教授に就任し、晩年まで、教育者として若手の育成に尽力しました。

（文学・マンガ　荒川）

「旧鈴木家住宅」の資料たち

第6回　同人誌『玫瑰珠（ろざりよ）』

本号では、鈴木信太郎が学生時代に、学友たちと刊行していた同人誌『玫瑰珠（ろざりよ）』を紹介いたします（①）。大正という古き良き時代の雰囲気を如実に伝える同誌からは、信太郎の交友関係に加え、学生時代の信太郎の翻訳や小説、エッセイを読むことができます。同時に、東京帝国大学を中心とする、日本における本格的なフランス文学研究のなりたちを物語る文献として、きわめて貴重なものでもあります。

同誌は、鈴木信太郎がまだ第一高等学校の学生だった時代に、先輩の團伊能（のち、東大美術史助教授）、山田珠樹（のち、東大司書官・仏文助教授）、久能木慎治（のち、法学士・弁護士）らと共に構想し、一九一七（大正六）年の一月に発刊しました。芥川龍之介や菊池寛らの『新思潮』や、室生犀星、萩原朔太郎などの同人誌『感情』が刊行されていたのと同時代のことです。

①同人誌『玫瑰珠（ろざりよ）』1917年創刊

②同人の集まり（1940年4月27日、偕楽園にて）

創刊号から終刊号にいたる約九年間に、『玫瑰珠』は四十一巻刊行されました。十数名の執筆者は、そのほとんどが信太郎の全生涯を通じて関わりの深い人々で、同誌の終刊後も、定期的に集まっては宴を催していた様子が、随筆や写真からうかがえます（②）。

同誌の構成は、翻訳、詩、戯曲、短歌、小説と多種多様で、執筆者・内容ともに、必ずしもフランス文学に関連したものではありませんでした。創刊号では、鈴木笙之助（信太郎の筆名）、團光樹（團伊能）、山田手捲（山田珠樹）、坂津木慎太郎（久能木慎治）ら、『玫瑰珠』の中心メンバーのほか、後に独文学者となる實吉捷朗や、信太郎の同級で、後に弁護士となる宮内嚴夫らが寄稿しています（「創刊号　目次」を参照）。信太郎が翻訳した「大理石の女」は、アンリ・ド・レニエの短編小説で、後に著書『近代フランス小説集』（春陽堂、一九二三年）の中に収録されます。

創刊号　目次

大理石の女（翻訳）　鈴木笙之助
鬱金集（詩）　團光樹
妄想（戯曲）　山田手捲
泉のさゝやき（詩）　實吉捷朗
熔岩の輝き（短歌）　宮内嚴夫
霊魂不滅（小説）　坂津木慎太郎
近代文藝に現はれたる厭世思想（翻訳）　ブウルヂエ（山田手捲）
雑録

また、東大仏文科の初代日本人教授として、信太郎と共に多くの後進を育て上げた辰野隆も、第十一号（一九一七年十一月）から、宇乃里雨という筆名で寄稿し、同誌の活動に大きく貢献しました。

他にも、第三十六号（一九二一年六月）では、森鷗外が、本名の森林太郎で寄稿しており、同人達の交流関係の広さをうかがい知ることができます。もっともこれは、同人の山田珠樹が、鷗外の長女・茉莉と婚約した縁によるものなのでしょう。

なお、「玫瑰珠」という題名は、同人達が自分たちの集まりを「玫瑰珠結社」と名付けていたことに由来し、「ろざりよ」とも「ROSARIO」とも記されました。異国の雰囲気を漂わせるこの題名については、創刊号巻末の雑録の中で言及がなされています。それによると、「聖壇に繰る珠数の宗教味を慕った故もあらう、その薔薇色を愛でた故もある、その文字の形に魅せられた所もあらう、其音のまろやかさを慕った故もある。様々の連想の混化が私達をして其名を取らせた」とあります。

『鈴木信太郎全集』の編集者の一人、平井啓之も指摘しているように、『玫瑰珠』の同人達が、北原白秋の『邪宗門』や木下杢太郎の南蛮風エグゾチスムの影響下にあり、芥川龍之介が好んで切支丹ものを書いたのと同じ頃に青春時代を過ごしたのだということを、鮮やかに物語っている文章です。　（郷土　古賀）

【参考文献】『鈴木信太郎全集』補巻、大修館書店、一九七三年／『フランス文学者の誕生』鈴木道彦著、筑摩書房、二〇一四年

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目に所在する歴史的建造物で、正確には「豊島区指定有形文化財（建造物）旧鈴木家住宅」という名称です。現在豊島区では、この建物を改修・整備して「（仮称）鈴木信太郎記念館」を開設する取り組みを進めています。

作品を見る 読む 7 ―河野通勢―

《長崎村の風景》図1というこの作品は、河野通勢（一八九五―一九五〇）が豊島区長崎を描いたものです。穏やかに広がる景色の中で、人々はあいさつを交わし、描かれた空や雲には深い奥行が感じられます。河野は年譜*1によると、一九一七（大正六）年一一月から北豊島郡大字高田村雑司ヶ谷に新妻と新居を構えています。一九二八（昭和三）年に小金井に転居しますが、その間、故郷長野と東京を行き来したり、上京してきた父次郎*2が住んでいた十条に暮らした時期もあったようです。区内で生活していたのは、大正から昭和初期にかけての一〇年余ということになるでしょうか。

図1　河野通勢《長崎村の風景》1924年頃、油彩・板、21.2×46.4cm、豊島区蔵
画面左の2本の白い柱が門柱。

河野は、大正期には岸田劉生が牽引した草土社に参加、モティーフを細密に描く一方、新聞小説の挿絵でも広く知られていました。関東大震災の被災地を記録したエッチング作品を残していることでも知られていますが、ではその時、河野はどこにいたのでしょうか。本作はそれを知らせてくれるようです。裏面に書き込みがあり、そこには「東京／長崎村之／風景也／小生関東／大震災に會／いしはこの所にて／左手の門のある処には／劇作家松居松翁／氏が住み居られなり」図2とあります。どうやら区内長崎に居たようです。

図2　作品裏の書き込み

松居松翁（一八七〇―一九三三）は初め松葉と号した宮城県生まれの劇作家です。松居は『文芸年鑑』によると、一九二三（大正一二）年（大正一三年版、一九二四年三月発行）には「東京市外下落合七三五」、一九二四（大正一三）年（大正一四年版、一九二五年三月発行）には「東京市外長崎村荒井一七二一」を住所としています。この転居は震災によるものとも考えられます。松葉の号が坪内逍遥と同じ読みなので、松翁と改めたのが一九二四年ですから、たとえ作品を描いたときに裏書をしなかったにせよ、これは一九二四年より後の書き込みだということが推測できます。そして松居は、長崎村荒井には一九三〇（昭和五）年まで居たようです。

一方河野は、年譜によると、一九二四年一月のはがきの住所は「長崎村荒井一八七六」、一九二五（大正一四）年一月のはがきの宛名として「府下下落合長崎村荒井一八〇一」とあります。このころ、頻繁に住まいを移っていたか、あるいは間借りも推測されます。しかし長崎村荒井に暮らしていたと考えてよいでしょう。なお、下落合は当時の淀橋区（現新宿区）であり、下落合長崎村という呼称は存在しません。けれど、確かに道一本を隔てて長崎村と落合村は接していますから、当時地名の認識が混同されていた可能性はあります。

河野と松居が非常に近い所に住んでいたことはとても興味深いことです。しかしそれ以上に本作は、風俗や芝居を題材にし、江戸時代を扱った小説の挿絵を多く手掛け、《竹林之七妍》（一九二三年、東京都現代美術館蔵）などを描いていたこの時期の河野が、白樺主催の芝居を見、舞台装置を担当していたことに加えて、歌舞伎座、帝劇、松竹などに脚本を提供していた松居となんらかの接点があった可能性を、濃厚に示しているのです。

（美術　小林）

*1　「河野通勢年譜」、『大正の鬼才　河野通勢』展カタログ（平塚市美術館ほか、二〇〇八年）所収

*2　長野の師範学校の画学教師で写真館も営んでいた。多岐にわたるその蔵書から河野は多くを学んでいる。

セピア色の記憶

第33回　牧場のある風景、牛が鳴く住宅地!?

左に示した二枚の写真は、ほぼ同じ地点から撮影した一九二〇年代頃と現在（二〇一六年六月撮影）の豊島区西巣鴨四丁目二七番街区の様子です。地図に示した＊印は撮影地点を、↓印は撮影方向を示しています。

上の写真はこの地にあった吉川牧場の写真（吉川実氏提供）です。「エッ！豊島区域になぜ牧場が…。」と驚かれた読者の方もいらっしゃるでしょう。実は、西巣鴨地域のみならず、現在の豊島区域にはかつて多くの牧場が分布し、牛乳を生産（搾乳業）、おもに東京市の中心部に出荷していました。

日本における牛乳の歴史は、古くは古代まで遡りますが、本格的に乳牛が飼育され、搾乳されるようになったのは江戸時代半ば以降のことです。ただし、この頃の牛乳や乳製品は高価であり、将軍や一部の武家などに限られた「薬」でした。

幕末の開港後明治時代にかけては、横浜居住の外国人向けに横浜に牧場を設けたり、東京市の中心部に住む外国人向けに牛乳店や牧場が開かれましたが、庶民にとってはまだまだ高価なものでした。

東京市の中心部での牧場経営は、新たな問題を引き起こします。例えば、牛の伝染病問題、悪臭問題などです。一九〇〇（明治三三）年に「牛乳営業取締に関する施行規則」が警視庁より出されると、それ以降、東京市の中心部にあった牧場の郊外移転が進みます。

豊島区域の牧場数が増えてくるのもこの頃で、北辰社・愛光舎・強国舎・興真舎といった、いわば東京牛乳界の老舗が牧場を開いています。また、東京市内あちこちにミルクホールが開店、かつての「薬」としての牛乳から「飲み物」としての牛乳へと、庶民にとって身近な存在になっていきました。

西巣鴨町東部事情明細図（1927年）より　吉川牧場のほか「保里牧場」、「小泉牧場」の記載がある

さて、冷蔵技術が未熟なこの時期、牛乳を新鮮な状態で東京の中心部に運ぶためには、道路事情に恵まれていることも重要でした。そのため、豊島区域でも現在の白山通りに近い巣鴨・西巣鴨エリア、あるいは春日通りに近い南大塚エリアに多くの牧場が分布していました。

吉川牧場は、乳牛八〇頭程度を飼育する区内では比較的規模の大きな牧場でした。しかしながら、住宅地内に所在していたため、「臭い」、「汚い」と周辺から不評を買うようになり、一九二〇年代後半には西巣鴨から板橋へ、さらに一九五四年には埼玉県戸田市へ移転して牧場経営を続けます。豊島区域の場合、牧場の郊外移転は、牧場跡地部分の都市化を意味していたのです。（郷土　秋山）

※本欄は、当館編『ミルク色の残像―東京の牧場展―』（豊島区教育委員会、一九九〇年）の記述の一部を参照しました。

2016年度豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備グループ事業予定
（2016年4月～2017年3月）

郷土資料館・ミュージアム開設準備グループ	勤労福祉会館改修工事のため休館中	2017年10月（予定） リニューアルオープン
	【仮事務所】 豊島区南大塚2-36-2　東部障害支援センター内	2017年3月（予定） 勤労福祉会館7階に移転
庁舎まるごとミュージアム（3階展示）	美術分野 ①「描かれたアトリエ村」 ②「仲間たちのいる景色」（仮称）	①7月7日（木）～11月8日（火） ②11月9日（水）～3月2日（木）
	郷土資料分野 ①　地域紹介「巣鴨編」 ②「豊島区と空襲」（仮称） ③「駒込・染井の園芸」（仮称） 	①4月15日（金）～8月18日（木） ②8月19日（金）～12月15日（木） ③12月16日（金）～4月13日（木）
	文学・マンガ分野 ①「乱歩と宇陀児と豊島区」 ②　追悼企画「舟崎克彦と豊島区」 ③「鉄人２８号」誕生６０周年記念 「横山光輝と豊島区」 	①4月1日（金）～7月31日（日） ②8月1日（月）～11月30日（水） ③12月1日（木）～3月31日（金）
講座・講演・見学会など	第11回新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館 関連事業　アトリエ村さんぽ道　区境を行くシリーズ2 「アトリエ村の作家たちが歩いた道―龍池会から太平洋画会研究所まで―」 講師：本田晴彦氏（アトリエ村資料室代表）	5月19日（木）
	豊島区ミュージアム開設プレイベント第５弾 「豊島ミュージアム講座」（全５回　土曜日）	10月22日、29日、 11月5日、12日、19日
刊行物	郷土資料館・ミュージアム開設準備だより 「かたりべ」120号～123号	年4回、2,200部、無料頒布 7月・9月・12月・3月発行予定
	研究紀要『生活と文化』第26号 付・2015年度年報	3月刊行予定 500部　有償頒布
	豊島区所蔵美術作品目録 豊島区が所蔵する美術作品815点を画像入りで紹介。	12月刊行予定 1,000部　有償頒布

※都合により事業内容や日程を変更する場合があります。
※事業の詳細は、「広報としま」または当館のホームページで随時お知らせいたします。

研究紀要『生活と文化』第25号 付・2014年度年報　価格1,000円　2016年3月発行
※郷土資料館仮事務所（東部障害支援センター内）・行政情報コーナー（区役所３階）にて頒布

「学童集団疎開（五）　マリアナ発空襲の始まりと冬の疎開地」　青木哲夫
「火打具にみる習俗と信仰　―豊島区及び近隣地域を事例として―」　三村宜敬
「千人針の形状的特徴と製作方法　―郷土資料館所蔵資料を中心に―」　岩崎茜・上田真紀
「戦時下につくられた国民服儀礼章」　山本昂伯
「豊島区で収蔵する美術作品　―池袋モンパルナスを問う―」　小林未央子

編集後記

「かたりべ」一二〇号をお届けいたします。今年度も年四回の発行を予定しておりますので、ご愛読のほどお願い申し上げます。

さて、豊島区立郷土資料館は、現在休館しております（平成二七年一二月一日より平成二九年九月三〇日〈予定〉まで）。その間も、多くの区民の方々や関係機関からお問い合わせをいただき、ご不便をおかけしております。

郷土資料館は、平成二九年一〇月（予定）の開館を目指し、展示内容のリニューアル作業に取り組んでおります。日々の調査・研究成果を活かし、また収蔵資料展などで展示した新しい資料をふまえて鋭意進めておりますので、ご期待ください。今後とも皆様のご理解・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

引き続き、「かたりべ」が幅広く皆様の調査・研究や学習支援に役立てていただけるよう、学芸一同、精進いたします。

（編集　髙木）

かたりべ
No.120
・
2016年7月8日
・
豊島区立郷土資料館
（休館中）
・
東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階
・
電話 03-3980-2351
URL：http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html